

台湾省国語推行委員会編「吳稚暉先生の生年」(一九五二)
張文伯著述「稚老聞話」(一九五二年ごろ)

『中国の思想家』下巻、一九六三年七月、勁草書房

解題

頼 惟 勤

昭和三十五年(一九六〇)七月に、中国語学研究会の機関誌『中国語学』は、「創刊一〇〇号記念論文集」の刊行を迎えた。しかしその巻頭の倉石武四郎会長の「百号記念のことば」(3012、五桁の数字は「著者論著目録」の番号。以下同じ)にあるとおり、これは昭和二十六年(一九五二)一月刊の『中国語学研究会会報』第一号から数えての百号(第三十四号から『中国語学』と改称)であり、これに先立つ昭和二十二年(一九四七)三月に創刊の『中国語学』、昭和二十六年(一九五二)一月に別刊の『中国語学研究会(関西)月報』を加えれば、創刊第百四十何号かに当るものであった。現在、二二八号の論文募集中の『中国語学』にも、既にこのように複雑な歴史が出来、昭和二十二年以来の『中国語学』を揃えている公共機関は殆どないのではないかと思われる程である。

本書の解題の出だしたにこのようなことを記すのは、戦後の『中国語学』の歴史さえ、既にかなり解り難くなっていることを指摘して、終始、中国語学研究会(現、中国語学会)の会長であられた倉石武四郎先生の一代の事業もまた、同じように解り難くなっている状況であることを象徴せしめたいがためである。この『著作集』全三巻は、これに先行する戦後の論集『漢字からローマ字へ』(25035)・『とろ火』(29052)・『中国へかける橋』(21076)などと共に、このような状況下において、先生の学問・主張を、世の中に伝える役を果すことになる。しかし本当はまだまだその一端に過ぎないことは、本巻収載の「著者論著目録」によって明らかである。以下、先生の学風と学問を、筆者の理解する小さな範囲に限って記述する。先生への呼称はこういふ際に甚だ選択に苦しむの

であるが、以下はやや客体化して「著者」とし、記述もそれに応ずる表現をとることをお許し願いたい。

著者によって提起され、実現された学風の要点は、中国文の音読に伴うものである。昭和三年（一九二八）、在外研究のため「日本の本土を離れた時から（中略）訓読を玄海灘に投げすて」た（09002, p. 19）とはこのことの発端である。

ここで少し時代を遡る。『新潟県人物百年史・続頸城編』（新潟県土越人物史研究会編、昭和四三年十二月）の「倉石侗窩」の章（同書p. 47～8）に、倉石家家譜に依拠したと思われる略伝があり、またこれとは別に、金谷山麓に建碑された「侗窩倉石君碑」の碑文があり（『新潟県頸城郡志稿』にもその概略を引く）、これと著者自述の回顧記事（0003, 2416, 本『著作集』第一巻に収めた2218～22等）とを彼此照合すると、侗窩（著者は自ら口にするときには必ず「興太先生」の称を用いた）ならびにその興した文武済美堂の概略が察知できる。因に、これより溯って、『懋堂日曆』に見える倉石氏（鈴木瑞枝氏「懋堂日曆主要人物索引並びに解説」安田学園研究紀要二〇、一九八〇、そのp. 20下段参照）は同族には違いないが、侗窩との関係は未詳である。ただし著者の用箋に「臥雲書室仍至正翠巖精舍果本玉篇版式」というのがあったことは受業生の等しく知るところであるが、その室名の由来をなしたと思われる「臥雲」の扁額は、松崎懋堂の筆であった。（『日曆』に一緒に現われる筭原氏は、溯って戦国末、倉石氏が信州方面から二、三の地を経て終に高田に定住することとなった際、その主筋であつたらしい本誓寺ゆかりの姓である。）

やがて時代は明治に入るが、一般論として、明治維新における旧藩の対処のしかたは、士分たると平民たると

を問わず、以後、昭和の前期ごろに至るまで、その人の行蔵に、深刻な影を落としていると思われる。侗窩をはじめ、著者の父祖の属した高田藩の場合は、例えば近隣の長岡藩の場合などとはこの点が大いに違い、高田の人士は、明治の近代化の政策に対して、それほど屈曲した心理なしに適応できたのではあるまいか。尤もこのような点は、他邦人からは容易に察知できない面もあり、これは単なる印象に過ぎないことはあろうである。

明治に入ってからの変学は、江戸期における全盛時代の余波を受け、特に大都市には、安井息軒・島田尊村らによって代表されるような、読書を何よりも尊重する学風が底流としてあつたと言われる。一方、重野成齋・塩谷青山ら幾多の漢学者が全国的にいて、文学（詩を作り、文を作るための学問）を尊重する学風が強烈であつた。しかしそのいずれの学風に立つ側も、既に後継者を拡大養成する能力を喪失しつつあつたことは明らかである。これは決して、これら諸学者の個人的な資質なり責任なりに帰せられるべき問題ではない。世を挙げての欧化の大潮流と、それを助長する日清戦争の勝利とが、必然的にもたらした結果である。ただ江戸期以来の変学の伝統はなおびびり、時として所謂「文王なしと雖も猶お興る」ところの豪傑の士を生み出した。

著者が大正の始めに上京、第一高等学校入学の頃の概況は、おおむね右の如くであつたと想像する。著者の場合は、時代から見ても、高田の人士という面も元よりながら、一高出身という面からの分析も必要であろうが、これまた局外者からは窺知できない面が多く、これ以上の言及は避けたいと思う。このころのことと考えられるが、懷中に細字の『文選』を所持して読みふけり、とうとう近眼になつてしまつた、との述懐もある。

大学時代の青森書院（塩谷青山の塾）滞在のことは、曾て「倉石武四郎博士略歴」（0001）を記述した際、憚り多く、削った記憶がある。しかしその後、却つて著者によって触れられているので、やや敷衍することが許されるであろう。塾の概略は「全体が斜面になつてしまつて」（0003, p. 155）とある如く、東京の小石川台の東北斜面に位置していた。この辺りは台地が二段階の傾斜をなし、どちらかといへば緩やかに千川（小石川ともい

たらしい。只今は晴寒に接し、直ちに白山台の、やや急な斜面に対してという場所である。地盤が堅く関東大震災によく堪えた。明治末の地図では、千川に沿って、水田が深く大塚方面に食い込んでいる様子が読み取れる。

上引の続きに「先生のおすまいは高いほうになっていて、塾は低いほうにたててありました」とある如く、敷地の斜面は五段に整地され、一番上の段は塾生の住まう礫荘、次の段は農家の庭先のような空地と井戸と小家屋、次の段が塾であった。周囲は柵で囲まれ、文武兼修の精神から、広い擊劍道場もあったが、もちろん主体は塾舎で、これは横長の建物を小部屋に区切ったもの、いま実見できる例で言えば備後神辺の萬葉夕陽村舎の遺構とよく似ている。塾生は食事のためには石段を二度上って、塾生の住居に行く必要があったようであり、礫荘の家族は、塾生の嗜好などを、後年までいくらかは諳んじていたようであった。塾のすぐ下の段は、どういう事情からか空地であり、その下の最下の段には小家屋があった。これがほぼその全貌である。(以上当時の実情を知る筋の言で記す。)著者の書斎には青山の「晴耕雨讀」の匾額が掲げてあったが、その由来を尋ねれば以上ようになる。因に、三木清氏「讀書遍歴」に記されている「小石川の塩谷先生のお宅」(208所引)は、上述の台地の反対側斜面に近い場所で、塾とは別である。

著者が東大にあきたらず、京大大学院入学の道を選んだ理由は、著者自らの述懐(0003, p. 165)にその片鱗をのぞかせているようにも思われる。公式的には、大正デモクラシーが、明治の權威主義に反発したということになるのであろうが、もちろんこれは勝手に想像をめぐらしての解釈である。(念のために附言するならば、当時の東大の専攻分野で、別の大權威者といえば、服部宇之吉博士であるが、篁村の流れを承ける服部博士の学統については、著者はその継承の条件を整えるべく、尽力したのではないかと想像される節があるが、これはずっと後のことである。)その他、考えられる理由を挙げてみれば、東京を中心とする欧化一辺倒の氣風、教科書・辞

書編纂にまつわる商業主義、学問の蓄積のゆとりを許さぬ性急さなど、いろいろあると思われるが、煎じ詰めれば、雑誌『支那學』を中心とする進取活発な学風と、内藤虎次郎博士とともにその学風を形成するのに与った狩野直喜博士の学問に引かれたということになるのではないであろうか。因に狩野博士こそは、篁村の学風を最もよく継承していたといわれる。

著者の京都行きは大正十一年(一九二二)のことであり、在外研究への出発は昭和三年(一九二八)である。この間、足かけ七年、既に国内で可能な限りを窮め尽くす状態であったであろう。(もちろん、学問の道は無限であるということとこれとは別問題である。)

この時期の狩野博士の『儀礼疏』の演習のことは著者の述懐が多いが(202もその一)、著者の最も得意とするところは、その「總麻」章の「士為庶母」節の「當云大夫已上」の「當」が「雷」の誤りであるということの看破であった由である。(著者直話。場所は毛本、卷十一、九十五葉表、八行め。匠本、卷三十三、八葉表、二行め。0001『儀礼疏改正』卷三十三、五葉裏、四行め以下。言うまでもなく、このような字形の近さによる誤りは、現在通用の字体「当」からは起りえない。)

以上、長々と述べたのは、「玄海灘に投げ捨て」たものが、どういりものであったのか、またどれほど重いものであったのかを解説しなかったからである。

なお、地元京都において、著者の音読の主張がどう受け止められたか、これは常識的に判断するより他はない。(0003, p. 17に参照)しかし、著者の主張が主流を成したとわれわれは信ずるものである。それは狩野博士の庇護もさることながら、著者とその同志の学力が超絶していたことによるに違いない。そして超絶した所以は、個人的資質を別とすれば、結局は中国への沈潜の深さということに落ち着くであろう。音読は、その沈潜の派生現象と見ることも可能である。

これによって助長された京都と東京との学風の相違は、当時の出版物を通じて知られるところが多いが、いま深入りしない。その後、著者の東西両大学兼任のころから徐々に学風の融和の兆しが現われ、昭和十六年（一九四一）には、東京の「漢学会」の大会が、支那学の本場、京都で開かれるに至った。石浜純太郎氏の尽力とのみ聞いていたこの大会も、京都側の一部では、東京の殴り込みと受け取る空気があった由を、戦後になって耳にした。それはさておき、著者とは狩野門下の双壁と称せられる吉川幸次郎博士の、辛辣な一場の講演があったこともまた事実である。（譯者がもしも『吉川幸次郎全集』巻一四を見る便宜を持つならば、その第五五六ページ「元典辞典」の一節「酔春風」のくたりに一見せられたい。並み居る東京勢を前にして、励声一番、「ここは東京のことを言う」と、博士の注釈が入った箇所である。）

この前後、東京の様子が作家の作品に入った例としては、武田泰淳『風媒花』、阿川弘之『春の城』を挙げることができるであろう。いずれも著者に彷彿する人物が登場するわけではない。しかし、前者については東京の権威主義に対する著者とは別途の対処の道を、そして後者については、著者による東京の学風の変貌の一端を、それぞれ見る事が可能である。

戦後については、既に本著作集第一巻の解題に見えるように、全国学会も順調に活動し、学風の差を保ちつつ、統一体を形成していると認められよう。著者の努力・指導によるところが多いこと、もちろんである。

二

著者の学者としての業績は、本著作集第一巻の戸川氏の解題によって、その大局が知られる。しかしその全貌は、本著作集第二巻（すなわち本巻）の同氏主編「著者論著目録」によって始めて明らかになるものであり、こ

れが、学んで厭うことなく、教えて倦むことのなかつた著者一代の業績の結集である。受業者は結局のところ、著者の全体のある面だけを具現して世に立っているような趣きがあるのではあるまいか。いうまでもなく、その一々の具現について、筆者の先輩・同輩においては、「後来を以て上に居る」と称すべき人傑が多く、後輩においては「後生畏る可し」と思われる俊豪が輩出しているにしても、である。いま「善く変ぜずと為す」の責問を甘受せざるを得ない者としては、如何に解題の文を進めるべきかに難渋せざるを得ない。以下は戸川氏の解題に倣い、著者の学問の精審・博洽を窺い知る事例を生のまま引き、解題の叙述に代えたい。

著者の博士論文は「段懋堂の音学」（0303）という。懋堂とは段玉裁のことである。論文は「清秘閣」の用箋、片面九行二十五字、三百七十五枚に記されている。標題の六字が一行を占めるので、ここだけ十九字が空格となるのを除き、全篇改行分段は一切なく、しかも、最終葉の最終格に、論文の末尾の文「時に昭和十二年丁丑九月三日倉石武四郎京都東山の廬居に識す」の「す」が納る。その他、雙行の夾注の左側の字数が九百二十五あり、著者は自ら記して「凡そ一十六萬九千六百五十六字」という。「こういう風に書くから、字数が数えられる」とは著者の述懐である。その代り、このままでの印刷公表は日本では困難で、嘗て某氏によって、分章分節改行加点が試みられた由であるが、その結果の報告は未見である。

解 題 論文は著者自ら「其の要を提」するところによれば「懋堂音学字の由来を尋ぬ」「六書音均表を羽翼す」「六書音均表を放正す」「懋堂の晩年定論を推す」の内容より成る。ここにその片鱗が現われているように、表現がどのように硬いのは、漢字を拾い上げ、順序を改めると、若干の虚字は別として、そのまま中国文言文になるように全文が書いてあるからである。

このうち最終部分だけが表現を平易に改めて「六書音均表について」（0302）として公表された。その大要を、原文の表現を借りて綴れば、「今詳に錢辛楣戴東原王石臚孔鵠約江子蘭江晉三諸家の往復辨論を述べて懋堂の己

を空しうして善く變じたることを顯せり」ということになる。

内容は専門に渉るのでこれを省き、「諸家の往復辨論」の標題のみを、印刷公表の分について列記する。(順不同)

- 錢大昕「與段若膺書」
- 錢大昕「詩經韻譜序」
- 錢大昕『潛研堂文集』卷十五「音韻答問」
- 戴震「轉語二十章序」
- △洪榜『四聲均和表』
- 段玉裁「寄戴東原先生書」
- 段玉裁の掲げる「戴東原先生來書」
- 戴震「本段若膺論韻」
- 戴震「六書音均表序」
- 段玉裁「聲類表序」
- 段玉裁「戴氏年譜」
- 段玉裁「蒼子小山書」
- 王念孫「大清教授文林郎四川巫山縣知縣段君墓誌銘」
- 王念孫「答江晉三論韻書」
- 王引之『經義述聞』卷三十一「古韻廿一部」
- 王念孫のみづから『六書音均表』に加へた批語

- 孔廣森『詩聲類』
- 江沅『說文解字音均表』
- 段玉裁「說文解字音均表序」
- 江有誥「寄段茂堂先生原書」

△附記

△『江氏音學十書』における削除箇所

- 段玉裁「答江晉三論韻」

*より詳しい文献の書誌的要素については『桜美林大学中国文学論叢』三号、七三・七二・七一ページ参照。

話は戻るが、民国の始め、上海で『四部叢刊』がはじめて出版された際、底本の精良もさることながら、集部の主要書が、これによつて容易に手にできるようになったことを喜ぶ声が高かった。著者はこの叢書の別集を、しまいから逆順に読破しようとし、まず『曾文正公集』から始め、やがて『羣經室集』に至り、「釋矢」「釋門」の諸篇を読み、阮元の学問に驚嘆したという。(著者自機)著者の博士論文は、全くこのような方法による読書の成果と称すべき業績である。本著作集の「清朝小学史話」の諸篇も、多くこの系統に属する業績である。(なお、この諸篇については、このような形でまとめて一本とすることを、著者は生前に計画したことがあった。)

著者の講義は、既にその一つが『目錄学』(5214)として刊行されたが、その他なお将来公刊されるべきものが多い。(著者論著目録『品類参照)なかでも、「支那学の発達」(5515)は最もその公刊が待たれるものであるが、故村尾刀氏の遺産に、この講義の際に配布されたプリント(目錄分類の具体例と、支那学必見書目)四十枚足らずが丁寧に製本されてあった。(十枚あまりの村尾氏の補足分を含む。)その末尾に、次のような試験問題プリント一葉が綴し入れられてある。村尾氏の書き込みは「昭和十八年九月十三日」とある。

「支那學の發達」試問

答案ハナルベク簡潔ナルコト

(一) 左の書籍の著者または編纂者の姓名(字號を以て代ふることを得)を擧げよ。

- (1) 讀史方輿紀要 (2) 大唐西域記 (3) 法言 (4) 墨子閒詁 (5) 通志 (6) 通藝錄 (7) 太極圖說 (8) 六書言均表 (9) 歷代名畫記 (10) 古逸叢書 (11) 困學紀聞 (12) 孔子家語 (13) 隸釋 (14) 經典釋文 (15) 經籍叢話 (16) 集古錄跋尾 (17) 金石萃編 (18) 後漢書 (19) 還魂記 (20) 畫禪室隨筆 (21) 七略 (22) 齊民要術 (23) 七經孟子考文 (24) 郡齋讀書志 (25) 新方言 (26) 新唐書 (27) 西廂記 (28) 閒情偶寄 (29) 西域水道記 (30) 篆隸萬象名義 (31) 集韻 (32) 述學 (33) 說文解字義證 (34) 十七史商榷 (35) 水經注 (36) 史記索隱 (37) 十駕齋養新錄 (38) 授時曆 (39) 日知錄 (40) 資治通鑑 (41) 儒林外史 (42) 三國志注 (43) 爾雅正義 (44) 儀禮疏 (45) 儀禮正義 (46) 藝舟雙楫 (47) 藝文類聚 (48) 燕樂攷原 (49) 文史通義 (50) 文選

(二) 左の人物の著書を一種つあげよ

- (1) 杜佑 (2) 陸法言 (3) 劉熙 (4) 劉淇 (5) 劉勰 (6) 劉知幾 (7) 劉向 (8) 顧野王 (9) 葛洪 (10) 桓寬 (11) 趙汝适 (12) 趙一清 (13) 洪昉思 (14) 阮孝緒 (15) 崔述 (16) 曹雪芹 (17) 秦欽 (18) 嚴羽 (19) 王充 (20) 王符

(三) 左の各項につきその數をあげよ

- (1) 說文の部首 (2) 中原音韻の部 (3) 廣韻の韻と佩文韻府の韻の差 (4) 鄭玄における三年の喪の月と王肅における三年の喪の月の差 (5) 四庫全書を貯へたる閣

(四) 左の人物の姓名をあげよ

- (1) 古韻を二十八部に定めたる人 (2) 晉代の有名なる地理學者 (3) 百宋一廬の主人 (4) 儂古文尙書を献上せる人 (5) 詩の八病を提唱せる人 (6) 紙を作り始めし人 (7) 崑曲を始めた人 (8) 桐城派を始めた人 (9) 北魏の時磨佛を斷行した人 (10) 公安派の最も有力なる人

(五) 左の數につきその内容を列記せよ

- (1) 十三經 (2) 十七史 (3) 十八省 (4) 五禮 (5) 三通 (6) 唐宋八大家 (7) 三都賦 (8) 三體石經 (9) 二程子 (10) 唐の三省

(六) 左の問ひに答へよ

- (1) 韻宋樓の書籍は今何處に歸したるか (2) 十三經注疏の監本とは北監か南監か (3) 筆劃の順に排列されたる字書はおよそ何時代に始まるか (4) 顧愷之の畫として傳へらるるものは何々なるか (5) 崇文書局は何處にありしか (6) 大都とは今の何處にあたるか (7) 蘭亭叙は何年に作られしか (8) 科擧の一甲一名の進士は何官に任ぜられしか (9) 慧遠は何といふ社を結びしか (10) 李東垣は如何なる學術にて有名なりしか (11) 總理各國事務衙門は何帝の時に作られしか (12) 康熙帝の次ぎは何帝なりや (13) 尼利學校に傳ふる五經正義の中にて八行本は何々なりや (14) 利瑪竇の原名は何といふか (15) 牧溪は何時ごろの人物なるか (16) 湖廣總督の管掌せしは何何有なるか (17) 魏武帝の短歌行は何言なりや (18) 氣韻生動の語は始めて何書に見えしか (19) 漢書の食貨志にあたるものを史記にては何と稱せしか (20) 太平御覽は何卷あるか

以上

著者自らの解説によれば、時代が降るにつれ、学生の常識が下落の一途をたどり寒心に堪えないので、最小限知るべきことを講義したとのことであつた。全体は十九章より成る。すなわち「叙説・目錄学・經学(上下)・小学(上下)・史学(上下)・地理学・制度(上下)・金石・哲学(上下)・文学(上下)・藝術・科学・叢書」である。(章の名は仮題)後に「本邦における支那學の發達」(501頁)の講義もあつたが、これには必見書目はない。

さて、著者は戦後に在つては、中国語学研究会長・日中学院長として活躍し、中国語辞書の編纂者、中国語教育の指導者、漢字問題に一家言を持つ学者などの面で知られた。しかしこの解題は、この面での著者の事業に及ぶことなしに終る結果となつた。これはもちろん、解題者の力の不足による。しかし、この解題によつて、どう

して著者は辞書を作り、語学教育を興し、漢字問題に熱意を持ち、最後に倒れるまで、文言辞書編纂の志を持ち続けたのか、その根本は指摘できたのではないかと思う。本著作集の本文そのものは、その筈として読むことができるはずである。以上で解題を終る。

『礼記』を読むものは、開巻まもなく「檀弓」に至り、何故にかくも葬式のことばかり書くのかに怪む。今回始めて解題の記述を担当してみても、ややその意味がわかって来たようにも思う。

昔、葦菽書院の喪事に当り、先生は靈前に俯伏のままいつまでも動かれず、周囲の者は取りなすべがなかったと聞く。のち狩野博士の逝世に遭い、自宅の一室に空位を設けて心喪に服され、離京時まで変らなかつた。そして先生の葬儀が東京青山で行われるに際し、吉川博士は別に板橋の喪居を弔問、哭泣の礼を以て告別、遺族はひとしく愴然としたと云う。

ただし、先生はいたずらに懷古に耽ることを嫌悪された。初めに引いた『中国語学』創刊百号出版の際、会員には学会発足当時の懷旧談を試みる者があつたが、先生の口頭での挨拶は、殆どそれに対しては叱責の語気を含んでいた。先生は、時代の推移に合わせて、ひたすら前進のみを目指された。この解題がその意に添うものであるかどうか、今となつては就正する由もない。

倉石武四郎博士論著目録

- * 本「倉石武四郎博士論著目録」は、『中国語学』226号(1979年11月)に収録された「倉石武四郎博士著述目録」を補訂して成ったものである。
- したがって、以下に、「倉石武四郎博士著述目録の作成について」をそのまま掲載した。また、今回の補訂にもれた計4篇を末尾に収録した。

倉石武四郎博士著述目録の作成について

- 本「倉石武四郎博士著述目録」は、故倉石武四郎博士〔明治30・1897年9月21日—昭和50・1975年11月14日〕の、論文・著作に関する作品を、大学における講義原稿や日中学院における講演録音テープなどを含め、網羅的に排列したものである。
- 本目録は、紀事本末の体例に準じて分類してある。博士の研究と教育の広範な分野にわたる業績の全過程が、博士の足跡の推移に沿って通観できるよう考慮し、できるかぎり細分化するにつとめて、30分目を得た。
- この30分目は、類別すると、
- I 支那学、とくに清朝小学
 - II 中国語学（音韻、方言、語法）
 - III 中国語教育（教科書、講座；辞書）
 - IV 中国文学（謝冰心、老舍、論語；翻訳をふくむ）
 - V 文字言語問題
- の5大別が、可能である。
- 本目録は、中国語研究会における昭和51年度全国大会の決議にもとづいて、作製せられた。編集作業は、鐘ヶ江信光会長より委嘱された眞椎勤・戸川芳郎・中野実の三氏が事に当たった。日中学院事務局の江尻健二氏、大修館書店「中国語」編集の中原尚道氏の協力をあおぎ、東京大学から松岡栄志・刈間文俊の両大学院生の援助をえた。
- 編集作業は、昭和52年6月より9月にかけて、主として、博士の著作を保存する日中学院図書室（東京都文京区後楽1丁目、善隣学生会館内）で行なわれた。
- 昭和51年秋から、東京大学東洋文化研究所によって準備され、昭和52年初頭から開始された、日中学院図書室の蔵書点検作業は、同年8月すえに、ほぼ完了した。その作業は、博士の配備しておかれた「日中学院図書室蔵書目録」カードを利用することによっ

倉石武四郎著作集 第二卷

漢字・日本語・中国語

定価 5,000円

1981年6月20日 第1刷発行

著者 倉石武四郎
発行所 くろしお出版

101 東京都千代田区神田小川町3-24

でんわ 03-291-3557

ふりかえ 東京9-31301

印刷 早稲田大学印刷所 製本 大洋社